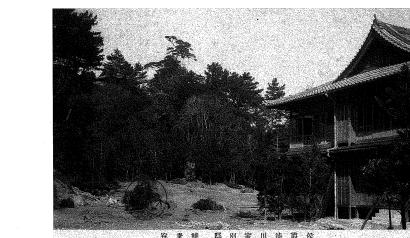


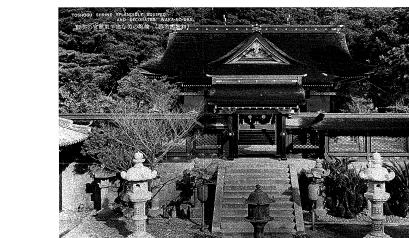
新和歌浦街 左奥の萬歳橋の左下海側は水族館。その上に月見堂が見えている。撮影は昭和初期。



正門 壬生川の東照宮と御殿門



双書館と庭園 我們の歌山県職員宿舎のあるところには、紀州鶴川家の別荘である双書館があった。後方山を負い、前面海に臨み、櫻松翠壁相映するの意より、双書館と名づく(大正12年『和歌山縣名勝圖真點』)という。写真には、双書館と庭園が写っているが、庭園は整備中のよう見える。撮影は昭和初期。



東照宮 昭和初期の東照宮社殿。現在、社殿保護のために取り付けられている部はない。



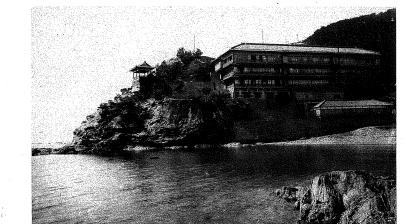
御殿跡と宝鏡閣 豊今宿の御殿跡と宝鏡閣の現景。常夜灯(現在は鳥居近くに移設されている)の左側の松は、御手洗池畔の松並木の一部である。



和歌浦全景 和歌浦の全景としては珍しいアングルで、現在の秋葉山湖水池付近からの撮影である。左手の尾根には、まだ由良庄がなく、眼下の島立島から寄越郷一帯は畠地である。明治42年頃の撮影と思われる。昭和初期にも、このような景観が広がっていた。



和歌浦全景 和歌浦の全景として珍しいアングルで、現在の秋葉山湖水池付近からの撮影である。左手の尾根には、まだ由良庄がなく、眼下の島立島から寄越郷一帯は畠地である。明治42年頃の撮影と思われる。昭和初期にも、このような景観が広がっていた。



萬歳塔 萬歳塔の右手には第2トンネルが掘られていたが、田野畠まで通じることはなかった。水族館はまだ造られていない。崖に掛け造りのようにして立てられているのは、月見堂。



南海遊園食堂 南海遊園食堂は、望海楼が経営していたが、モダンな建物であった。撮影は昭和初期。



新和歌浦望海楼 昭和初期の新和歌浦望海楼の全景。一部が洋風に改築されている。



蓬莱岩 比丘岩と呼ばれていたのが、昭和の頃には蓬莱岩と呼ばれるようになった。蓬莱岩と名付けたのは、大正期の当地を訪れた、後藤新平と言われている。岩の穴は、侵食のために現在では大きく広がっている。撮影は昭和初期。



天神磯 手前の砂浜は、漁船の船着場になっていた。現在も自然の浜として残されている。撮影は昭和初期。

各文末()内の頁は「和歌浦が語る思い出の和歌浦」の該当頁。

昭和初期の和歌浦

制作 松井瑛雄

電車軌道敷地は電車専用軌道で、住宅地と和歌浦小学校の間を走っていた。人の歩ける道はなかった。電車の線路の両側には、道はなく、犬走りしかなかった。案は、線路脇に二階建の建物の建っていたので、家の真下を電車が通っていた。(50頁)

谷井さんの家のところは、やつの壇といつた。ここだけを矢田川がズーと流れてきて、ここは閑戸になる。僕らの遊び場。トンボもとんくるし遊び場。これを離れてた。僕の10歳くらいのときかなあ。築港から、トロッコの線路引いてね、SLの小さい、機関車でよおけないで、ほほ、青岸から、そこから砂を運んできて、水田を埋めてしまつた。(52頁)

天満宮の夏祭りには夜店が出た。御手洗のところに店がズーと並んで、それはものすごいもの。天さん(天満宮)の名物は、タマゴの天ぷら(シカケ)。白のまわりに串刺しのタマゴの味噌をつけて、食べながら歩いた。(25頁)

下馬の丸川水面を利用して牡蠣船の料理店があった。舟が駐めていた。舟を立てて舟の上の料亭店を作った。牡蠣船料理店は昭和10年頃まであった様に思う。(45頁)

郵便局から下馬の手前ぐらいまでが商店街。その先是商店街ではなかった。平畠という大きな家があったが、隣接銀行のあたりは民家。西幸(ニシコウ)の醤油蔵があった。商店街は松木さんとところまであって、松木商店はとてももあって、よく釘を貰うに行かれた。3銭に買って貰って新聞に入らんでもらった。あそこには何でもあった。(37頁)

釣りは主に磯釣りで、磯には船で渡る。父親と行う。出島のキヤウ食堂とかで親子話をしてもう。親戚に釣舟を持っている人があって、それに乗せて乗せてもらうこともあった。船で田舎、雑賀崎の方まで行く。(29頁)

出島大若の東側の場所は魚市場で、ここで買賣をする。荷物を運ぶる石橋で、そこには舟宿になっていた。そこでセリをした。セリすな石橋のみの浜に上り場があり、そこに舟宿があった。魚の安い漁港が鮮魚を入れて来て、食堂がようやった。(31頁)

は住宅地

市町前の埋め立てのところは遊び場に広がった。砂場で、シマメが一面に生えていた。シマメの実をもつて苗を作つて鳴らすとビーと鳴る。月見草が白生えて、秋には花が咲いた。遊ぶのはここではなく、ここを横切つて堤防の方に行く。(37頁)

片男波では、砂地なのでキヌとかガッチャとかが釣れた。釣り竿を使った投げ釣りではなく、ビスマテンビンという釣り。木の棒にテグスを巻き取って、先にビンビンと言うて、真籠の籠をつけたものを投げ込んで釣った。(29頁)

片男波の防波堤 災害を受ける度に片男波海岸の一本松は、この地のランドマークとして永く地元の人々に親しまれてきた。堤防上に一段高く築かれた波返しは大正元年の豪風雨以降のものである。二箇所では料理旅館の片男波館。

新和歌浦から片男波の眺望 細長く延びる片男波の海岸線が一望できる。昭和初期の景観。

新和歌浦から片男波の眺望 細長く延びる片男波の海岸線が一望できる。自動車が走ることのできる道路になっている。自動車道路として完成したのは昭和5年3月である。

谷井さんの家のところは、やつの壇といつた。ここだけを矢田川がズーと流れてきて、ここは閑戸になる。僕らの遊び場。トンボもとんくるし遊び場。これを離れてた。僕の10歳くらいのときかなあ。築港から、トロッコの線路引いてね、SLの小さい、機関車でよおけないで、ほほ、青岸から、そこから砂を運んできて、水田を埋めてしまつた。(52頁)

和歌浦で皆二十歳になると兵役で6ヶ月隊に入営した。1月10日と決まっていた。そのとき、入営者々君と書いた札を持って、出島の人々と和歌の人も和歌浦全員が秋谷まで送ってきた。そこから入隊する人だけ電車に乗つてゆく。(45頁、43頁)

明光通り北入口の石柱に象のおじいちゃんの名前もある。由良さんのごとまであまりい違でなかった。あちらに造られた道は明正通りと言うて、石碑がある。ここに由良庄とが渡辺の別荘に上がる道がついている。ここに並り土の堤のようなものがあり、ようけ板が傾けてあった。僕ら子供の頃、新和歌浦の新古野に行かんと渡辺さんの別荘と言つて、昔ここに花見にきた。和歌浦の人は、皆ここにきた。(42、41頁)

和歌浦の堤防は、おん塔の端の堤防

奇洲郷(現在の和歌浦郷)は、子供の頃は煙で、海底で漁船が漁作は決まっていた。冬は雪を積んで、麦わらをかぶるころに海面を干して、海苔を乾燥させるのに海の上を歩いて、僕の海苔を干すために、台輪を轍に立て掛けた。天日で干す。このとき火をかけて乾物を干すことになる。一石一鳥、海苔は大約3月ころに終わる。4月、5月に丁度麦が伸びてきて、それを刈る。麦を刈ったあとにサツマイモを植える。サツマイモを探り付けて、盆に開け合うように、お供えをする。また、出荷する。その後、海底の干場にするため種をこしらえた。これが和歌浦の年中行事。ここに久野丹波守の屋敷があったが、旗掛はほとんどない。地名もも残っていない。奇洲郷とか、外れとかいう。ナガタノ郷、ここは種田千代を要請して、農業改良のため行った。山からの淡水をもじつ汽水、ボラーノマもコイもさわいい。ここには無数に堤がある。450軒程度の海苔をやっていたときも、各家庭に自分との畠用の場を作った。それは淡水、雨水の畠。(42頁)

奇洲郷(現在の和歌浦郷)は、子供の頃は煙で、海底で漁船が漁作は決まっていた。冬は雪を積んで、麦わらをかぶるころに海面を干して、海苔を乾燥させるのに海の上を歩いて、僕の海苔を干すために、台輪を轍に立て掛けた。天日で干す。このとき火をかけて乾物を干すことになる。一石一鳥、海苔は大約3月ころに終わる。4月、5月に丁度麦が伸びてきて、それを刈る。麦を刈ったあとにサツマイモを植える。サツマイモを探り付けて、盆に開け合うように、お供えをする。また、出荷する。その後、海底の干場にするため種をこしらえた。これが和歌浦の年中行事。ここに久野丹波守の屋敷があったが、旗掛はほとんどない。地名もも残っていない。奇洲郷とか、外れとかいう。ナガタノ郷、ここは種田千代を要請して、農業改良のため行った。山からの淡水をもじつ汽水、ボラーノマもコイもさわいい。ここには無数に堤がある。450軒程度の海苔をやっていたときも、各家庭に自分との畠用の場を作った。それは淡水、雨水の畠。(42頁)

和歌浦の堤防は、おん塔の端の堤防

奇洲郷(現在の和歌浦郷)は、子供の頃は煙で、海底で漁船が漁作は決まっていた。冬は雪を積んで、麦わらをかぶるころに海面を干して、海苔を乾燥させるのに海の上を歩いて、僕の海苔を干すために、台輪を轍に立て掛けた。天日で干す。このとき火をかけて乾物を干すことになる。一石一鳥、海苔は大約3月ころに終わる。4月、5月に丁度麦が伸びてきて、それを刈る。麦を刈ったあとにサツマイモを植える。サツマイモを探り付けて、盆に開け合うように、お供えをする。また